

土木工学・建築学委員会 気候変動と国土分科会
佐賀低平地への適応策実装検討小委員会（第25期 第4回）

議事要旨

■日時 令和4年12月15日（木曜日）10時00分～12時00分

■場所 遠隔会議

■参加者 阿部、荒牧、池田、大原、小松、橋本、満石、望月（五十音順、敬称略）
オブザーバー 若干名

■議事概要

（1）前回の議事概要について

・望月委員が前回の議事概要を説明。

（2）流域治水の最近の状況について

・阿部委員が流域治水の最近の状況について説明。

（3）気候変動と国土分科会の動向について

・望月委員が国土分科会の動向について説明。

（4）意見交換

・議題（2）、（3）に関し、意見交換。主な内容は以下のとおり。

（5）その他

・特になし

■流域治水の最近の状況に関する説明と意見交換の主な内容

（六角川水系流域治水協議会の動向）

・「新・六角川水系流域治水プロジェクト」を策定。

・その後「行動計画」を作成。

・特定都市河川浸水被害対策法による六角川上流区間（武雄市域）の指定に向けて調整を進めることを確認。

・他の市町は実情を踏まえた同法の運用など、検討の上で要望・提案していくことを確認。

（意識改革の必要性）

・早い時期から住民の方々の意識改革が必要。

・浸水常襲地帯の住民の意識改革を意図して、ソフト対策関係チームとハード対策関係チームを編成。地域に入って説明や議論。

・流域治水の最終的な到達点は、住民の方々も含めて当事者意識を持ってもらうこと。施設と意識の両立。

（各市町の問題意識等へのフォローの重要性）

・議論を通じて問題意識等を把握するとともにフォローする必要。フォローが無いと各市町が本気で取組めない。具体的には以下を実行。

・本川と牛津川合流点の合流形状による洪水流況への影響をカメラを設置して監視。

・ポンプ運転調整時の特定のポンプの稼働可能性を分析して報告。

・高潮時の河口堰閉鎖の有無による内水への影響の違いについてわかりやすく説明。

（各機関の当事者意識や相互の連携に関する課題）

- ・国土交通省、河川管理者として頑張ると他の管理者等の当事者意識が低下。当事者になりきれていないケースも。
- ・一方、内水・外水のように相互に密接に関係しているにもかかわらず、当事者がハッキリと区分されているようなものもある。もう少し、お互いに踏み込むことができれば進みやすい。
- ・属人的な運営に頼らないような仕組みや制度が必要。

(流域内対策の効果の明確化)

- ・ため池活用や田んぼダムなどは雨の降り方によって効果も異なる。効果をハッキリさせないと理解も進まない。

(流域治水に関する質疑応答)

- ・流域治水協議会における市民意見等の把握についてどう考えるか。←当面、出前講座などの市民や企業の意見等を把握する場を活用し、その結果を協議会につなげる方法を検討。
- ・上下流問題についてどう考えるか。←下流の整備が進んで、いよいよ上流の整備が本格化となると、下流側はその影響を意識する。このため、首長への説明を始めているところ。また、下流についても整備を実施し、進度調整を図ることも重要。
- ・住宅を建てるディベロッパーの意識や住民の意識を変えていく必要があると思うがどうか。←宅地開発の適正化は重要な課題。武雄市は立地適正化計画の見直しを行っているところ。これに対して浸水実績だけでなく将来改修後の浸水状況のデータを提供。市と国でお互いの情報を共有する状況を実現できた。不動産関係にも将来改修後の情報を提供する必要。売り手側も買い手側も出前講座等を通じて意識を持っていただく。
- ・武雄市長は浸水を無くそうと考えておられるのか、浸水は残る中でやっていこうと考えておられるのか。また、危険箇所の移転のみを考えておられるのか、全体的な市街地の計画の中で移転を考えておられるのか。←令和3年洪水を対象に床上浸水をゼロにすることを目指しておられる。また、将来も浸水が残る浸水常襲地帯ではあるが、一方で居住が見込まれる土地に、水と共存できるレイクタウンのようなものを考えておられる。その中で、危険箇所からの移転も入ってくるのではないかと。
- ・高齢者だけでなく30代、40代の方々も出前講座に参加して欲しいところだが、工夫はあるか。←消防団長から消防団の中の若い方や新入隊員に参加を働きかけていただくことを期待。また、他の地区から移住されてきた方には若い方も多い。こうした方からご意見を伺う機会を設けるなどの工夫も。

(その他の質疑応答)

- ・①ヨシ対策で高水敷に整備している池の水位維持は難しいのではないかと。②池によって堤防付近の流速に影響はあるか。←①感潮区間であるため大潮の満潮時に水が入る高さに設定しており、そのタイミングで水が入れ替わる。10年前から試験施工をやっており、水が枯れるとか土砂で埋まることもなく機能。②低平地河川ではもともとの流速が速くない。このため、過去10年間においても流速の増大によって法面浸食が助長されるようなことは無かった。
- ・六角川本川と牛津川の合流形状の決定理由如何。←いろいろと調べたが、施工上の理由という推察以外には確認できていない。

(委員による指摘等)

- ・ 激特事業が完了しても内水被害が残るといった内水と外水が関係することを示したデータは重要。議論が進んでいく。
- ・ 高潮が最も大きな脅威。浸水頻度がどうなるのか、常態化するところまでいくのか、といった問題意識。
- ・ 時間軸で考える必要。未来永劫同じ場所で安全に住めると考えず、ある程度の期間で住む場所を変えていかざるを得ないということも視野に入れる必要あり。都市計画もそういうことを考えていくことが必要。
- ・ 高潮や洪水の想定最大浸水深が3m以上となる市街化調整区域内の箇所では、新規の建築が原則禁止となった。
- ・ 高潮と洪水の複合災害について、確率を考慮して被害額を計算した研究がある。

■ 気候変動と国土分科会の動向に関する意見交換の主な内容

(「見解」骨子に関する質疑応答)

- ・ 土石流・泥流にも耐えられるような住宅についても考えるべきではないか。←今回は洪水に焦点を当てている。気候変動の影響を踏まえた土砂災害の状況も考慮しないと土地利用の検討ができないが、今後の課題とした。

—以上—